

かねのくま　お　づ  
金隈小津遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第497集

1997

金隈小津遺跡調査会  
福岡市教育委員会

かねのくま お づ  
**金隈小津遺跡**

福岡市埋蔵文化財調査報告書第497集



1997

金隈小津遺跡調査会  
福岡市教育委員会

# 序 文

福岡平野の東部に位置する月隈から青木へ延びる丘陵には、弥生時代から古墳時代を中心に各時代の遺跡が数多く分布しているところで有名で、壺棺墓群をはじめとする墳墓群が存在します。

なかでも、弥生時代前期から後期にわたって壺棺墓が営まれた金隈遺跡は、特に著名で、弥生時代の社会や墓制を知ることができる貴重な成果が報告されています。

今回発掘調査した金隈小津遺跡は、この金隈遺跡が立地する丘陵西側の水田地帯で発見されました。遺跡は律令時代の水田遺構を主体として、土器・瓦が出土しました。調査面積が狭く、遺跡の実態を把握することは困難ですが、福岡平野における律令時代の条里の成立や整備状況を知る手懸かりとなり得るものです。

本書はこの発掘調査成果について収録したものです。本書が市民の皆さんのが文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、広く活用していただければ幸いです。

なお、発掘調査から整理報告までの間に多くの方々のご協力をいただきました。心から感謝の意を表する次第であります。

平成9年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田 英俊



調査地点遠景

## 例　　言

1. 本書は、福建住宅株式会社の宅地開発に伴い、金隈小津遺跡調査会が昭和53年8月1日から8月11日の期間中に発掘調査を実施した金隈小津遺跡の調査報告である。
2. 金隈小津遺跡調査会の会長を福岡市教育委員会文化課長とし、遺跡調査会と原団者の福建住宅株式会社との間で発掘調査の受託契約を締結した。ちなみに受託金額は発掘調査費の30万円である。
3. 発掘調査の主体は金隈小津遺跡調査会とし、実際には社会教育部文化課が発掘調査を担当した。
4. 金隈小津遺跡の試掘調査及び発掘調査は、文化課埋蔵文化財係事前審査担当の井澤洋一が担当した。
5. 本書に掲載した遺構の実測は、井澤、池田孝弘、今泉雄二、中富一夫、田中照美が、遺物の実測は、井澤、池田、廣寄香が行い、遺構・遺物実測図の製図は池田、牛房綾子が行った。
6. 遺構の写真撮影は井澤が行い、遺物の写真撮影は池田が行った。
7. 本書に掲載する遺構一覧表は池田が作成した。
8. 本書の製作に当たっては、吉田扶季子、池田洋子、田中昭子の協力を得た。
9. 遺構番号は発掘調査で検出した順に番号をふり、本書では遺構略号を遺構番号の頭に付けた。遺構略号として用いたのは、SK（土壙）、SB（掘立柱建物）、SD（溝）、SP（柱穴）である。
10. 本書の遺物番号は通し番号で示し、図版番号に一致させている。
11. 本書で用いた方位は磁北である。
12. 本報告にかかわる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収録・保管される予定である。
13. 本書の執筆は、第1章を井澤、第2章を池田、第3章・第4章を池田、井澤が行った。
14. 本書の編集は、池田、牛房の協力を得て、井澤が行った。

遺跡調査番号	7819			遺跡略号	KNO
地番	福岡市博多区金隈字小津511-1, 511-7, 511-8 511-9, 512-1, 513-1			分布地図番号	金隈11
開発面積	1,804m <sup>2</sup>	調査対象面積	200m <sup>2</sup>	調査面積	200m <sup>2</sup>
調査期間	1978年（昭和53年）8月1日～1978年（昭和53年）8月11日				

# 本文目次

第1章 はじめに.....	1
1. 調査に至る経過.....	1
2. 発掘調査の組織.....	1
第2章 遺跡の立地と環境.....	3
第3章 考古的経過と概要.....	5
1. 調査経過.....	5
2. 概要及び土層.....	6
3. 遺構各説.....	8
(1) 土壌 (SK) .....	8
(2) 掘立柱建物 (SB) .....	11
(3) 溝 (SD) .....	12
(4) 柱穴 (SP) .....	13
4. 遺物各説.....	13
(1) 溝 SD01出土遺物.....	13
(2) 溝 SD02出土遺物.....	14
(3) 整地層出土遺物.....	14
(4) その他の遺物.....	18
第4章 まとめ.....	19

# 挿図目次

Fig. 1 周辺遺跡分布図 (縮尺1/25,000) .....	IV
Fig. 2 調査地点位置図 (縮尺1/3,000) .....	2
Fig. 3 調査地点周辺の旧地形図 (縮尺1/6,000) .....	4
Fig. 4 調査地点周辺の字図 (縮尺約1/6,000) .....	4
Fig. 5 現況図、及び発掘調査区域図 (縮尺1/800) .....	5
Fig. 6 試掘トレンチ配置、及び旧河川位置図 (縮尺1/500) .....	6
Fig. 7 A・B・4 トレンチ土層概略図 (縮尺1/100) .....	7
Fig. 8 調査区西壁土層図 (縮尺1/120) .....	7
Fig. 9 遺構配置図 (縮尺1/100) .....	10
Fig. 10 土壌 SK01・02、掘立柱建物 SB01実測図、溝断面図 (縮尺1/40) .....	11
Fig. 11 溝 SD01・02出土遺物実測図 (縮尺1/1・1/3) .....	12
Fig. 12 遺構面、整地層内出土遺物実測図 (縮尺1/1・1/3) .....	15
Fig. 13 暗渠出土の土管実測図 (縮尺1/4) .....	17
Fig. 14 溝 SD01～04配置図 (縮尺1/120) .....	20

## 表 目 次

Tab. 1	掘立柱建物一覧表	18
Tab. 2	金隈小津遺跡遺構一覧表	18



Fig. 1 周辺遺跡分布図 (縮尺1/25,000)

- |             |           |           |             |                |
|-------------|-----------|-----------|-------------|----------------|
| 1. 久保園遺跡    | 2. 赤穂浦遺跡  | 3. 宝満尾遺跡  | 4. 天神森遺跡    | 5. 立花寺遺跡       |
| 6. 金隈遺跡     | 7. 金隈小津遺跡 | 8. 影ヶ浦古墳群 | 9. 提ヶ浦古墳群   | 10~13. 持田ヶ浦古墳群 |
| 14. 今里不動古墳  | 15. 仲島遺跡  | 16. 井相田遺跡 | 17~19. 麦野遺跡 | 20. 南八幡遺跡      |
| 21. 三筑遺跡    | 22. 高畠遺跡  | 23. 板付遺跡  | 24・25. 諸岡遺跡 | 26. 井尻B遺跡      |
| 27. 那珂瀬ツサ遺跡 | 28. 雀居遺跡  |           |             |                |

# 第1章 はじめに

## 1. 調査に至る経過

昭和50年代は、現在のような急激な開発状況ではなく、特に市街地周辺では目立った開発行為は僅少であった。月隈丘陵周辺地域においては、大型の開発よりも小規模な建て売り住宅建設を主体としていた。当時、この地域は、僅かな新興住宅地を別にすれば、純農村地帯の景観を呈していた。

昭和53年（1978）4月25日付けで、福建住宅株式会社から「開発計画事前審査願」が提出され、事前審査会を経て、埋蔵文化財有無確認の試掘調査を実施することにした。

当該地は、国指定史跡金隈遺跡の所在する丘陵西側の標高約12.5mを測る水田地帯に位置しており、現地は既に100~120cmの厚さに盛土が行われていた。

試掘調査は昭和53年6月20日に雨天の中で実施したが、水田遺構等の判断がつかないため6月26日に再度試掘調査を行った。その結果、開発予定地の南側において上塙・溝等を検出した。北側では水田跡と考えられる整地層を確認したが、当時の考古学的な水準から云えど、この土層が積極的に水田跡とするには事例不足であったことや、時期が不明であることから発掘調査の対象から除外した。

発掘調査に当たっては、当時の文化課長を代表とする金隈小津遺跡調査会を結成し、この調査会と福建住宅株式会社との間で受託契約を締結した。

発掘調査は福岡市教育委員会文化課が主体となり、昭和53年8月1日から8月11日の期間に実施した。

## 2. 発掘調査の組織

（昭和53年度）

調査委託 福建住宅株式会社

調査主体 金隈小津遺跡調査会

会長 清水義彦（福岡市教育委員会社会教育部文化課長）

事務局 三宅安吉（埋蔵文化財係長）

木村義一

調査担当 福岡市教育委員会社会教育部文化課（当時）

発掘調査担当 井澤洋一（事前審査）

試掘調査 福岡市教育委員会社会教育部文化課（当時）

埋蔵文化財係 井澤洋一（事前審査）

調査協力者 池田孝弘、今泉雄二、中富一夫、田中照美、城戸健一

関 サヨ、石内清美、伊東トシコ、鶴田サヨコ、白垣スミエ、清水スエノ

（平成8年度）

整理報告担当 福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課 井澤洋一

整理作業 調査員 池田孝弘、牛房綾子、廣嵩香



Fig. 2 調査地点位置図 (縮尺1/3,000)

## 第2章 遺跡の立地と環境

福岡市の東部に位置する月隈丘陵は、太宰府市の大城山（410m）に派生し、北西方向に延びる丘陵で、その尖端は空港ターミナル側の青木地区が相当する。丘陵の西側には御笠川が流れ、さらに西側の春日丘陵との間に沖積平野が形成されている。

金隈小津遺跡は、月隈丘陵のほぼ中央部にある国指定史跡の金隈遺跡の西側に位置し、御笠川と金隈遺跡が所在する丘陵部とに挟まれた平野部にある。当該地の標高は約13mで、丘陵部との比高差は約23.5m、御笠川との比高差は約2mである。

月隈丘陵一帯は、戦後米軍の弾薬庫があったことや採石場、果樹園等が多かったこともあり、正式な発掘調査は少なかった。しかし、近年の宅地開発や東半尾運動公園建設、道路整備等に伴い多くの発掘調査が行われ、次第に月隈丘陵における歴史的背景が明らかになってきている。

縄文時代の遺構は現在のところ確認されていないが、立花寺遺跡において縄文時代の石器が出土している。

弥生時代には、金隈遺跡をはじめとして、下月隈B（下月隈宮ノ後）遺跡、下月隈天神森遺跡、宝満尾遺跡、上月隈遺跡、席田青木遺跡等の墳墓遺跡等がある。又、影ヶ浦遺跡では前期から後期にかけての貯蔵穴群、大谷遺跡では中期の貯蔵穴、後期の住居跡群と掘立柱建物、久保園遺跡では大型の掘立柱建物と中期から後期にかけての住居跡、中尾遺跡では中期の住居跡を検出している。

主な遺物としては赤穂ノ浦遺跡では、谷部の遺物包含層から横帶文銅鐸の鋳型片が弥生式土器と共に出土し、宝満尾遺跡では内行花文明光鏡が土壙墓から出土している。又、人谷遺跡では中国舶載鏡と思われる鏡片や銅戈を描いたと思われる石製品が、金隈遺跡ではゴホウラ製貝輪が出土している。これらのことから月隈丘陵における弥生時代の遺跡は平野部の開発進行と共に隆盛の時期を迎えたことが推察され、近年に発掘調査した雀居遺跡の大型建物の存在はそれを裏付けるものである。

古墳時代になると、丘陵南部には持田ヶ浦古墳群、影ヶ浦古墳群、堤ヶ浦古墳群、觀音ヶ浦古墳群等の群集墳が築かれ、特に持田ヶ浦古墳群はA～Fの支群に分かれ、総数150基以上を数え、丘陵北部の席田地域では2～3基で構成される古墳群が存在している。この時期の堅穴住居跡は中尾遺跡、久保園遺跡、立花寺遺跡で発見され、中尾遺跡では、掘立柱建物も検出されている。

古代以降の遺構は調査例が少ないが、久保園遺跡では13世紀の青磁碗・白磁碗を副葬した土壙墓2基が存在した。立花寺遺跡では奈良～平安時代の掘立柱建物・柵の遺構と共に、越州窯青磁・邢州窯青磁・綠釉陶器・瓦等の、12～14世紀の輸入陶磁器等が出土している。

又、御笠川を挟んで西側に位置する仲島遺跡、井相田C遺跡では、弥生時代から鎌倉時代の遺構・遺物が発見され、人面墨書き土器・墨書き土器・木簡・瓦・権・柿経・卒塔婆などが出土している。御笠川流域の水田跡や条里の施行状況、律令時代の集落等の資料は乏しく、今後に期待されるところである。

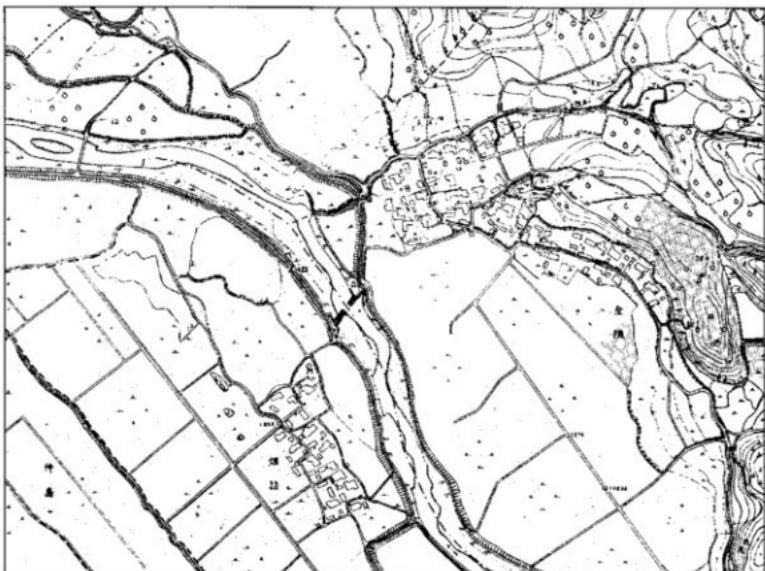


Fig. 3 調査地点周辺の旧地形図（縮尺1/6,000）

※昭和16年頃、アミは調査地点

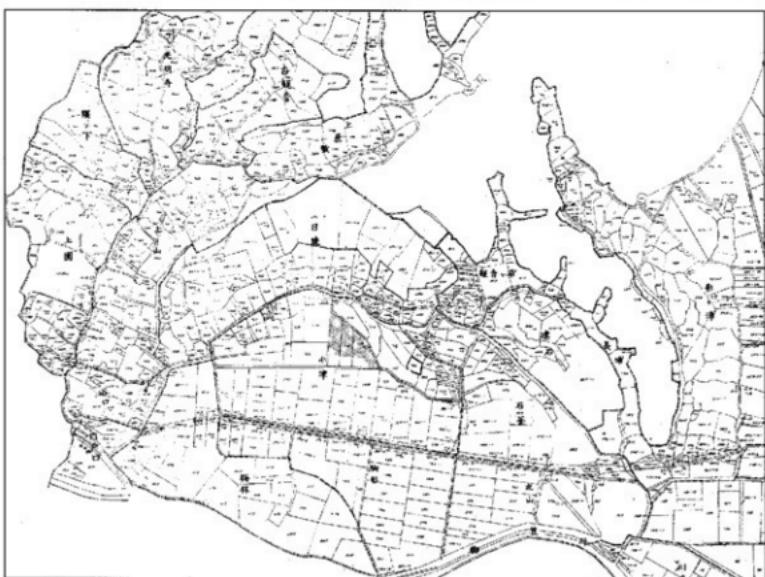


Fig. 4 調査地点周辺の字図（縮尺約1/6,000）

※アミは調査地点

## 第3章 調査の経過と概要

### 1. 調査経過

昭和53年4月25日に「開発計画事前審査願」の申請が出されたことを受けて、昭和53年6月20日と26日の両日に亘って試掘調査を行った。試掘調査はFig. 5・6に示すとおり開発申請地全域を対象として行った。トレーンチは、当初の20日にはA・Bトレーンチの2本を設定した。

Aトレーンチは、開発区域の北側境界線に沿う形で、東西方向に長さ約29mのトレーンチを設定した。Bトレーンチは、開発区域の西側境界線に並行して、南北方向に設定したが、BT-1～4に分割して行った。各トレーンチは間隔を置いて設定し、北からBT-1、BT-2、BT-3、BT-4とした。このうちBT-4においては整地層及び包含層を確認したので、BT-4トレーンチの東側を拡張し、遺構の検出に努めた。

さらに26日には調査範囲の確定のためにBトレーンチの西側に並行して、2本（C・Dトレーンチ）を、東側に2本（E・Fトレーンチ）を設定した。

その結果、開発区域の北半部では東西方向に広がる幅5～12mの旧河川と思われる土層の堆積を確認できた。しかし、河川跡周辺においては、水田跡等の遺構は検出できず、遺構は開発区域の南側に



Fig. 5 現況図、及び発掘調査区域図 (縮尺1/800)

集中して存在するものと推定した。この結果を受けて開発区域の南部に調査区域を設定し、発掘作業を行ふことにした。

発掘調査は、昭和53年8月1日から開始した。当該地は宅地開発のために、既に100~120cmの盛土が行われていた。調査の開始に当たっては、盛土を除去するためにユンボ（バックホー）を使用し、整地層と考えられる包含層上面の検出に努めた。又、8月4日からは作業員を投入し、整地層上面において人力による遺構の検出作業を行った。

当該地は御笠川に近く、低地であるため湧水が著しかった。連日、午前中は排水作業に費やし、発掘作業は午後から行うという状況であり、且つ、炎天下のため発掘作業は困難を極めた。

遺構の発掘作業は8月10日までに終了し、遺構の清掃、写真撮影、遺構の実測を行い、発掘調査は8月11日に全て終了した。

## 2. 概要及び土層

当該地の旧地目は水田であるが、宅地造成のため既に厚さ約1.2mの盛土が行われていた。

Aトレンチの土層は、Fig. 7の模式図に示したように、上層から第1層は表土（盛土）、第2層は耕作土（水田）、第3層は灰褐色粘質土（砂混り）、第4層は黒褐色粘質土（砂混り）、第5層は黒褐色砂質土、第6層は灰褐色砂質土、第7層は基盤の淡青灰色粘質土となっている。

層序は大略水平堆積であるが、第3層の厚さは西方向に向かって徐々に薄くなり、逆に第4層は厚

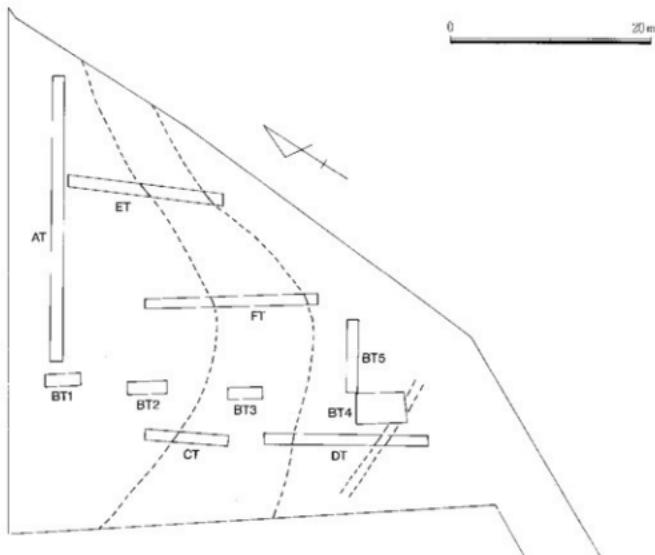


Fig. 6 試掘トレンチ配置、及び旧河川位置図 (縮尺1/500) \*Tはトレンチを示す

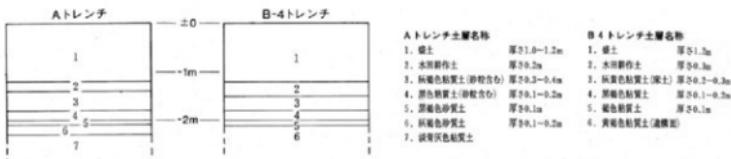


Fig. 7 A・B-4 トレンチ土層概略図 (縮尺1/100)

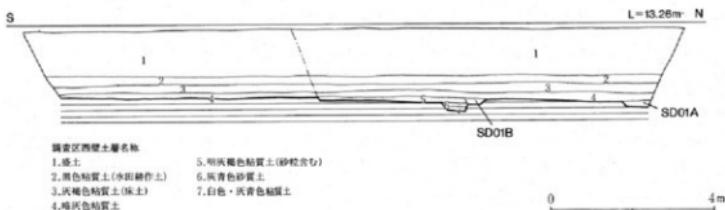


Fig. 8 調査区西壁土層図 (縮尺1/120)



西壁土層面 北側



西壁土層面 南側

くなっている。しかし、第4層の下面のレベルには変化がないところから、第3層の堆積の際に第4層を浸食したものと考えられる。第3層は、第2層水田耕作土の床土であろう。第4層～第6層は、堆積状況から水田耕作土と考えることも可能である。

Eトレーンチの土層状態はAトレーンチに酷似するが、第6層は黄味が強く、粘性を増していく。又、第6層と第8層の間には、第4層の黒褐色粘質土が存在するが、これも水出面と考えられる。

B4トレーンチの土層では、Aトレーンチの上位の層序と基本的には変化がない。ここではAトレーンチに見られた第5層が存在しない。又、第5層はAトレーンチの第6層より褐色がかった、粘性も強くなり、褐色粘質土となる。

このトレーンチにおける遺構面は、第6層の黄褐色粘質土上面が相当するが、この土層は質的にはAトレーンチの第7層の淡青灰色粘質土と同じであるが、青灰色に汚染されていない。第4層、第5層は遺物を多量に含んでおり、整地層と考えられる。しかし、この層の上面においては遺構の確認はできなかった。

これらのトレーンチ調査の結果、CT・DT・ET・FTトレーンチの地山面において、東西に横断する形で旧河川が存在することが判明した。この河川は北方向から蛇行しながら西方向に流下するもので、川幅は西側が広くなる。この河川を挟んで、南側はBトレーンチの第5層の基盤層が存在し、河川の北側ではAトレーンチの第6・7層が基盤層となっている。

調査区内の土層は、Fig.8に示したように上層より第1層—盛土、第2層—黒色粘質土（旧耕作土）、第3層—灰褐色粘質土（床土）、第4層—暗灰色粘質土、第5層—明灰褐色粘質土（砂粒を含む）、第6層—灰青色砂質土、第7層—白色・灰青色粘質土の層序となる。第6層と第7層は土壌SK02の堆積土である。

第5層はBトレーンチ土層の第5層に相当するが、基盤となる層である。第5層上面から土壌、掘立柱建物、溝、柱穴等の遺構を検出した。遺構面は北側に向かって次第に低くなる。又、第4層は南側で約10cm、北側で約20cmの厚さを測り、第5層とは対象的に北側に徐々に厚く堆積する。第4層の上面のレベルは大略水平である。この層は須恵器・土師器・瓦など7～8世紀の遺物を多く含んでいるが、その多くが細片であることから、整地層であると考えられる。遺構は第5層よりも、この第4層の上面から掘り込まれた可能性があるが、確認できなかった。しかし、この第4層が整地層であるとすれば、7～8世紀の須恵器や瓦片等の出土や東西方向・南北方向の溝の存在を考え合わせると、官衙等の存在が推定される。

第5層上面で検出した遺構は、土壌2基、掘立柱建物1棟、溝4条、柱穴等であるが、特に溝は東西方向・南北方向に掘削されており、条里方向と一致する。

### 3. 遺構各説

遺構は、第4層の整地層上面では検出できなかったが、第5層の明灰褐色粘質土の上面から土壌2基、掘立柱建物1棟、溝4条、柱穴等を検出した。

#### (1) 土壌 (SK)

土壌は2基検出した。既に削平を受けており、遺存状態は悪い。



調査区全景  
(南から)



遺構の状態  
(北から)



溝 SD01・02の状態  
(東から)

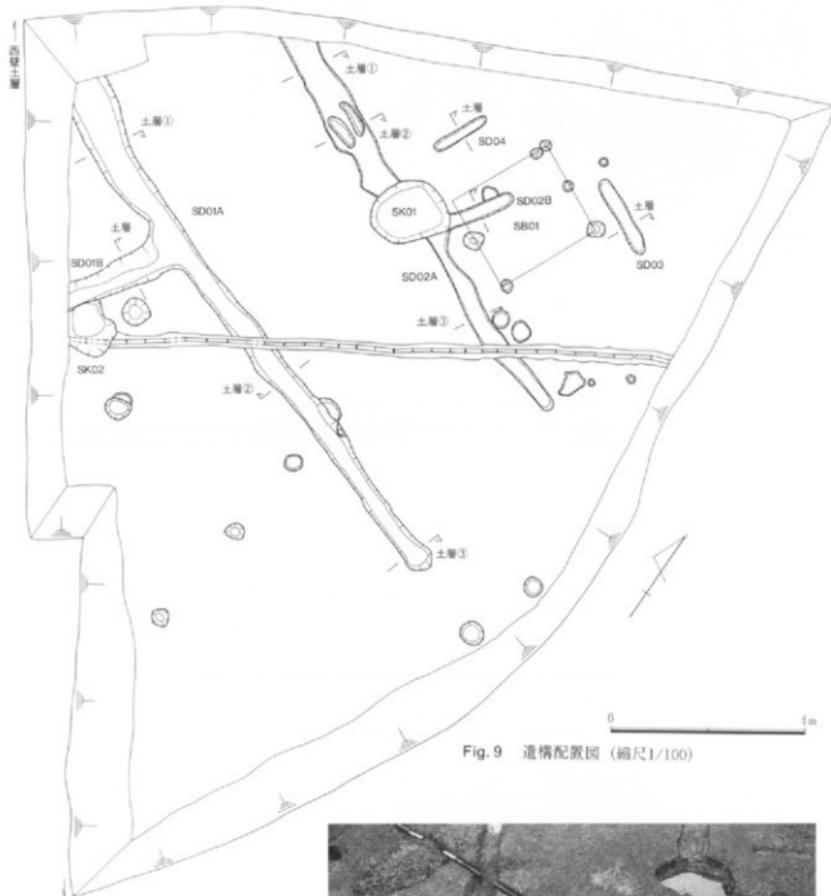


Fig. 9 造構配置図 (縮尺1/100)



近世暗渠の状態  
(南から)

SK01 (Fig.10) 平面形は不整隅丸長方形、断面形は逆梯形を呈する。長さ1.5m、最大幅1.25m、深さ35cmを測る。溝SD02の中央を切っている。遺物の出土はない。

SK02 (Fig.10) 西側境界地で検出した。平面形は不整円形、断面形は逆梯形を呈する。長さ1.2m、最大幅90cm、深さ32cmを測る。溝SD01B、及び近世の暗渠に切られる。遺物の出土はない。

## (2) 掘立柱建物 (S B)

Pit の数が少なく、又、削平を受けているため遺存状態はよくない。柱筋が通るものがあるが、建物としたのは1棟のみである。

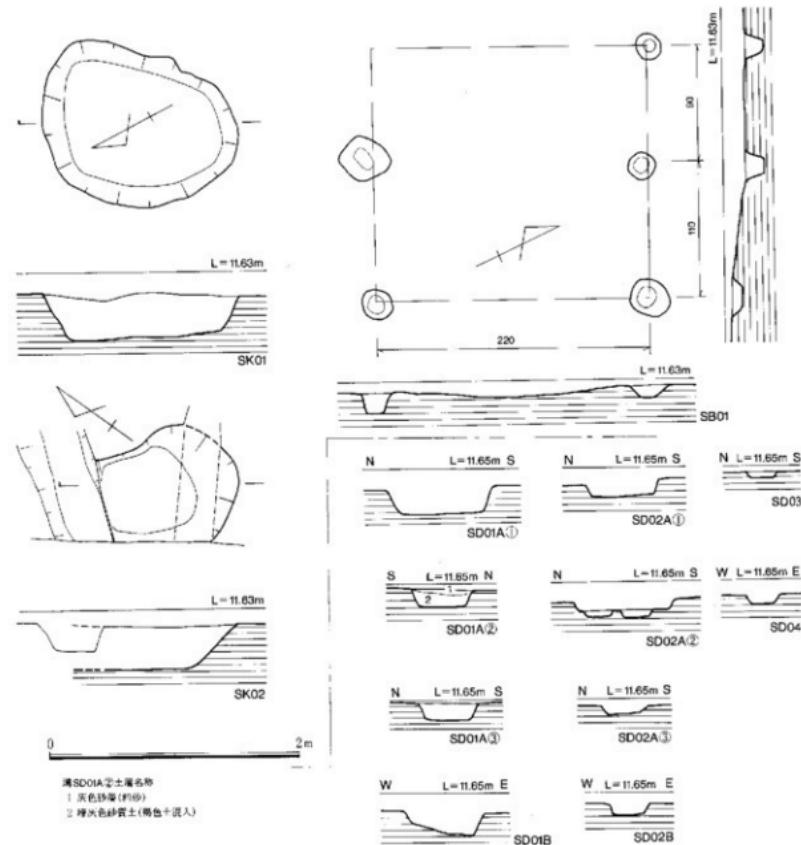


Fig.10 土壌SK01・02、掘立柱建物SB01実測図、溝断面図（縮尺1/40）

**SB01** (Fig. 10) 調査区の北側に位置し、溝 SD02 の北側で検出した。柱穴の一部を欠く。桁行 2 間、梁行 1 間の建物であるが、東端の柱穴は検出できなかった。桁行 2.0 m、梁行 2.2 m で、N 24° E に主軸方位をとっている。溝 SD01 及び SD02 と主軸方向を同一にしており、又、SD02A、SD03、及び SD04 に囲まれるように位置することから、これらの溝と共存関係にあるものと思われる。遺物は出土しなかった。

### (3) 溝 (S D)

溝は、全部で 4 条検出した。いずれも削平を受け、遺存状態は悪い。SD01 と SD02 にはそれぞれ分歧する溝が存在する。ここでは主流の溝を SD01A、SD02A とし、付属する溝を SD01B、SD02B とした。

**SD01A** (Fig. 10) 西側の境界地に位置するため、12.25 m の長さを確認するにとどまった。大略東から西方向にまっすぐに延びる溝で、西側に行くに従い幅は広く、且つ、深くなる。断面形は逆梯形を呈する。排水溝としての機能が考えられる。溝上面の幅は 40~100 cm、深さ 22 cm を測る。

覆土から須恵器・土師器・瓦・石槍・獸骨（牛、又は馬の歯）等が出土した。

**SD01B** (Fig. 10) SD01A に付属して大略南方向に延びる溝である。西側境界地にあるため、長さは 2.3 m を確認するにとどまった。溝上面の幅は 50~70 cm、深さ 22 cm を測る。断面形は逆梯形を呈する。土壌 SK02 を切っている。

覆土から須恵器・土師器が出土した。

**SD02A** (Fig. 10) 西側境界地に位置するため、長さは 9.4 m を確認するにとどまった。SD01A と並行して、大略東から西にまっすぐに延びる溝である。平面形は SD01A に類似し、西側に向かって幅は徐々に広くなる。断面形は逆梯形を呈する。SD01A と同様に排水溝であると思われる。溝上面の幅は 25~80 cm、深さ 12 cm を測る。土壌 SK01 に切られる。

覆土から須恵器・土師器が出土した。この須恵器の坏は、外底部に高台を持つもので、8 世紀に属

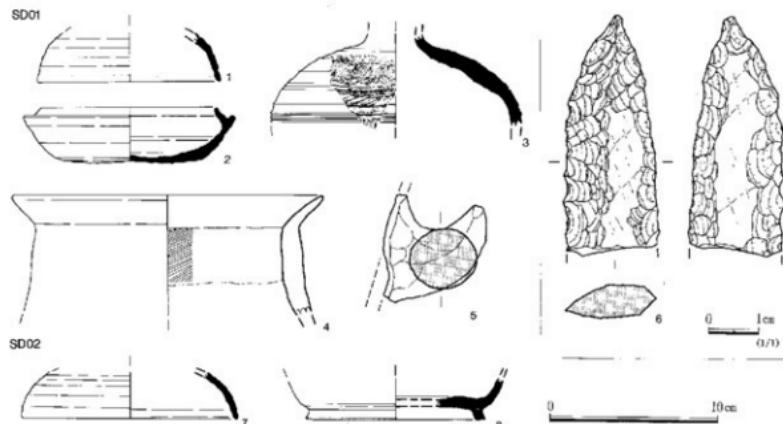


Fig. 11 溝 S D01・02出土遺物実測図 (縮尺1/1・1/3)

するものと考えられる。

**SD02B** (Fig.10) SD02Aの中央付近から分岐して北に延びる溝である。SK01に切られている。溝の長さは1.4m、溝上面の幅は30cm、深さ10cmを測る。断面形は逆梯形を呈する。掘立柱建物SB01と切り合い関係にあるが、先後関係は不明である。柱穴から土師器が出土した。

**SD03** (Fig.10) SD02Aの西側に並行する南北方向の短い溝である。長さ1.7m、溝上面の幅は30cm、深さ4cmを測る。断面形は逆梯形を呈する。溝SD02A及び、SD04と共に掘立柱建物SB01を囲むように位置することからSB01に付随する雨落ち溝的な機能が考えられる。柱穴から土師器が出土した。

**SD04** (Fig.10) 掘立柱建物SB01の北側に位置する東西方向の溝である。SB01の雨落ち溝と思われる。長さ1.25m、溝上面の幅25cm、深さ7cmを測る。断面形は逆梯形を呈する。遺物の出土はない。

#### (4) 柱穴 (S P)

柱穴と思われる小穴は約20個検出した。掘立柱建物SB01を構成する5個の小穴以外には、建物としてまとまるものは確認できなかった。しかしながら、柱筋が通る柱穴も存在するところから、掘立柱建物SB01より規模が大きな建物の存在が推測できる。小穴からは出土した遺物も少なく、わずかにSP03から須恵器坏片が出土しているだけであるが、これらより8世紀頃の時期が推定できる。

### 4. 遺物各説

#### (1) 溝 SD01出土遺物 (Fig.11)

SD01Aから出土した遺物には、須恵器坏・坏蓋・甕・壺、土師器甕・瓶、瓦、石器、獸骨がある。SD01Bから出土した遺物には須恵器坏、土師器甕・高坏がある。いずれも破片で、図示できたものは少ない。1~3は須恵器、4~5は土師器、6は石器である。1はSD01Bから出土、他はSD01Aからの出土である。

**須恵器・坏蓋** (1) SD01B出土。体部は丸味をもち、口縁部との境は軽く屈曲する。口縁端部は丸くおさめる。口径11cm、現存高3cmを測る。内外面ヨコナデ調整である。焼成は軟質で、外面は磨滅している。灰青色を呈する。

**坏** (2) SD01A出土で、1/3の破片である。底部と体部の境に軽い段を持つ。体部は丸みをもつ。強く内傾した立ち上がり部を有している。底部外面はヘラケズリで、部分的に静止ヘラケズリを施す。体部内外面はヨコナデ調整、内面には強い段がある。口径10.5cm、底径5.4cm、器高3.3cmを測る。砂粒を多く含む。焼成は良好。青灰色を呈する。

**甕** (3) SD01A出土。体部上半の破片である。中位に貝殻腹縁による刻目を施す。外面は上位がヨコナデ調整で、中位にはカキ目を施す。内面はヨコナデ調整である。最大径15.2cmを測る。焼成は良好。灰青色を呈する。

**土師器・甕** (4) SD01A出土。体部上位は内傾し、器壁は肉厚である。口縁部はくの字形に屈曲し、内側に強い稜を有している。内面上位は粗い斜めのハケ調整、下位はヘラケズリを施す。口径19cm、現存高7.2cmを測る。外面は磨滅している。焼成はやや不良。淡黄褐色を呈する。

**瓶** (5) SD01A出土。把手である。現存長6cm、中央部の最大径4.1cmを測る。断面形は梢円形であ

る。胴部との接合方法は貼り付けである。焼成は軟質で、色調は黄褐色を呈する。

**石器・石槍** (6) 横長の剥片を用いた打製の石槍で、基部を欠いている。現存長4.8cm、幅1.9cm、厚さ0.7cmを測る。縁端部から細かい刃部調整を行っている。サヌカイト製である。

## (2) 溝 SD02出土遺物 (Fig.11)

溝 SD02A から出土した遺物には須恵器坏・坏蓋・甕、土師器、SD02B から出土した遺物には土師器がある。いずれも小片で、図示できたものは須恵器 2 点にすぎない。2 点とも SD02A からの出土である。

**須恵器・坏蓋** (7) 復原口径13cm、現存高2.8cmを測る。体部は丸みを持ち、口縁部は丸くおさめる。内外面ともヨコナデ調整である。焼成は良好。やや暗い灰青色を呈する。

**坏身** (8) 外底端部に断面形がコの字形の高台を貼付ける。体部は丸みを持って立ち上がる。底部と体部の境は強い段を持っている。内外面ともヨコナデ調整を施す。高台径9.6cm、現存高2.5cmを測る。焼成は良好で青灰色を呈する。

## (3) 整地層出土遺物 (Fig.12)

整地層から出土した遺物には弥生式土器、須恵器坏・坏蓋・鉢・甕・壺・高坏、須恵器赤焼け土器の坏、土師器高坏・坏・甕・壺、内黒土器碗、瓦類、石器がある。多くは小片で、図示できるものは少ない。9~33は須恵器、34は土師器、37~40は瓦、41は石器である。

**須恵器・坏蓋** (9~19、28~30) 16は赤焼け土器である。9は擬宝珠形のつまみを有する。13~16は天井部のつまみを欠く。10~13は口縁部内側に長いかえしを有する。11~12・15・16の口縁部内側のかえしは短い。10~12・14・15は内外面ともヨコナデ調整である。13の外面天井部はヘラケズリ調整を行い、内面はナデ調整である。16の天井部は、逆時計回りのヘラケズリ調整を行う。12・14・16の胎土には砂粒を含む。9~12は青灰色、13は灰色、14・15は灰青色、16は茶褐色を呈する。17~19は口縁部の破片である。いずれも、端部を内側に折り曲げており、18のかえしは長い。17は端部を小さく曲げ、内側に沈線状のくぼみを付けている。28~30は坏蓋の天井部、又は身の底部片で、外面にヘラ記号がある。

**坏身** (20~27) 20~27は外底部に高台を有するタイプで、20・23・24は底部端部に高台がつく。20・23・24・25の高台の底部は外に引き出され、ハの字形に開いている。22・26・27の高台は低く、断面形はコの字形を呈する。23の高い高台は底部と体部の境に付けられる。22・26・27は底部と体部の境に段をもつ。20は砂粒を多く含む。23は焼成がやや不良である。20~22・25は濃青灰色、23・26・27は灰色、24は茶褐色を呈する。24は赤焼け土器である。

**鉢** (32) 復原口径23cm、現存高4.8cmを測る。口縁端部は丸く外につまみ出す。底部と体部の境は明瞭ではない。内外面ナデ調整である。焼成は良好。青灰色を呈する。

**甕** (33) 口縁部の破片である。口縁部は外反し、上端部は肥厚する。端部は丸みをもっている。内外面ヨコナデ調整を施す。復原口径20.6cm、現存高3.7cmを測る。焼成は良好。内面は灰色、外面は黒灰色を呈する。

**高坏** (31) 壱部・裾部を欠く。脚部は外に開く。内外面ヨコナデ調整を施す。焼成は良好。青灰色

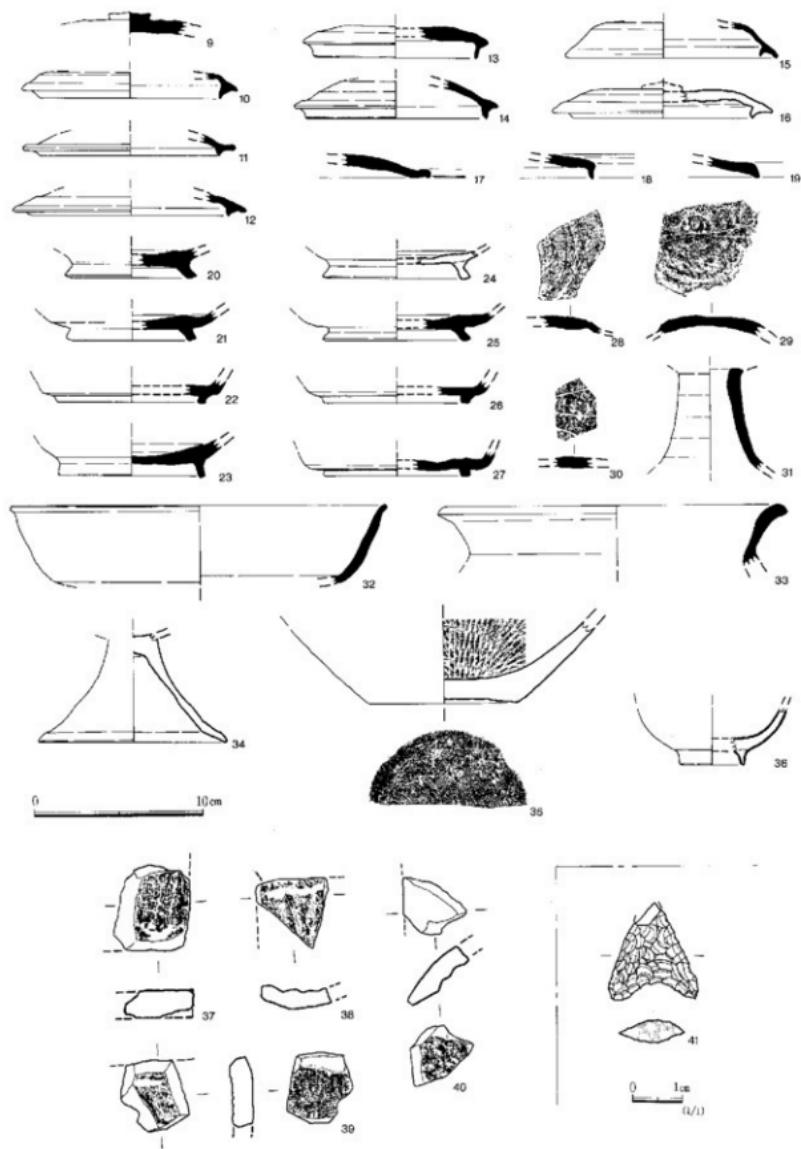
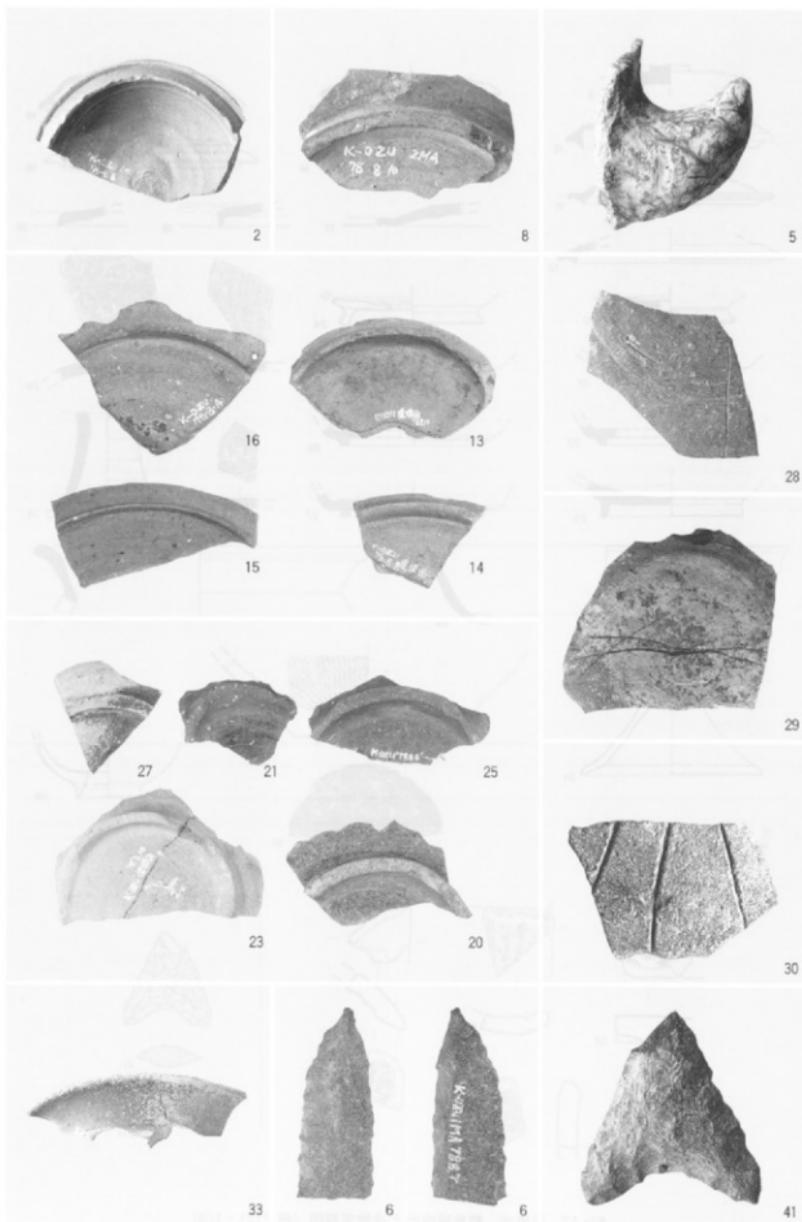


Fig.12 遺構面、整地層内出土遺物実測図 (縮尺1/1・1/3)

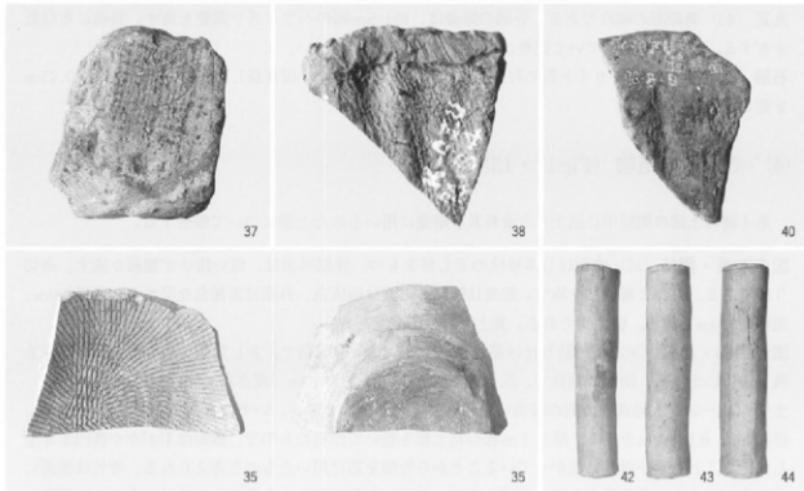


出土遺物

\*数字は捕获番号に一致する。

を呈する。

土師器・高坏 (34) 坏部を欠く。筒部は外に大きく聞く。裾部は内湾氣味に外反し、端部は丸くおさめる。筒部と裾部の境は内面に稜をもつ。底径11.4cm、現存高6.7cmを測る。内外面ともに磨滅しており、調整は不明である。胎土は精良。焼成は不良である。茶褐色を呈する。



出土遺物

\* 数字は挿図番号に一致する

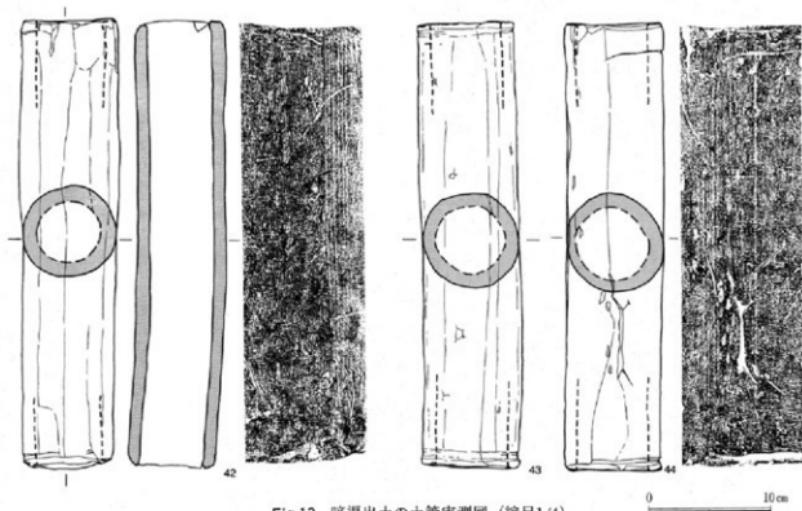


Fig.13 暗渠出土の土管実測図 (縮尺1/4)

0 10 cm

**瓦・平瓦** (37~39) いずれも小片である。全部で9点出土した。いずれも谷部に布目痕がある。37は谷部に布目痕をもつ。背部は磨滅していて調整は不明である。38は須恵質の瓦である。谷部は布目痕、背部はヘラによるケズリを施す。39の谷部は布目痕、背部はハケ目を施す。3点とも側縁部の資料で、側縁部はヘラ切り落としを行い、谷部に深い布端圧痕をとどめる。37と39は胎土に砂粒を含む。

**丸瓦** (40) 側縁部の破片である。谷部の側縁は、約1.9cm幅のヘラケズリ調整を施す。谷部に布目痕を有する。背部は磨滅していて調整は不明である。焼成はあまい。

**石器・石鎌** (41) サヌカイト製の打製石鎌で、先端部を欠く。現存長1.9cm、幅1.8cm、厚さ0.45cmを測る。

#### (4) その他の遺物 (Fig.12・13)

第4層の上部の掘削中に出土した資料及び暗渠に用いられた土管について報告する。

**国産陶器・摺鉢** (35) 内面は11本単位の下し目をもつ。体部外表面は、粗い指ナデ整形を施す。糸切り底である。外面に褐色釉を施す。焼成は堅緻。内面は暗灰色、外面は茶褐色を呈する。底径9.0cm、現存高5.0cmを測る。唐津焼である。表土からの出土である。

**国産磁器・小碗** (36) 長い貼り付け高台を有する。釉は透明釉で、少し黄味がかったり、骨付を残し全体にかかる。胎土は精良で、灰白色を呈する。高台径4.0cm、現存高3.5cmを測る。

**土管** (42~44) 大略東西方向の暗渠に使用されていた土管である。いずれも素焼きで、長さ36.5cm、径8.0cm、孔径6.0cmを測る。厚さ1cm程の粘土板を巻いて作ったもので、横断面形がやや楕円形を呈していることや筒が微妙に曲がっていることから竹筒を芯に用いたものと考えられる。青竹は表面には油分があるので分離材を必要とせず、表面に細かい布目痕がみられるのは巻き付けた粘土を固定するために上から布を捲き、筒の両端部で固定したのであろう。接合部の貼り合わせは、明瞭で、表面はタテナデ調整を施す。赤褐色を呈する。胎土に灰色の粘土塊が含まれている。近世のものであろう。

Tab. 1 掘立柱建物一覧表

遺構名	規模	柱行 (cm)		梁行 (cm)		方位	床面積 (m <sup>2</sup> )	柱穴状態				出土遺物	備考	
		実長(尺)	柱間寸法(尺)	実長(尺)	柱間寸法(尺)			Pit数	深さ	直径	延長			
S B01	1×2	220(7.3)		220(7.3)	300(6.6)	106(3.5)	N24°E	4.4	5	6~14	22~35	30~35	—	なし
						94(3.1)								

Tab. 2 全限小津遺跡遺構一覧表

遺構名	印遺構名	遺構種類	形態		規模 (cm)			出土遺物				時期	備考
			平面形	断面形	長	幅	深	Pit数	深さ	直径	柱根径		
S K01	P 12	土塹	不規則丸 長方形	逆梯形	150	125	35	なし					
S K02		土塹	不整円形	逆梯形	120	90	32	なし					
S D01A		溝		逆梯形	1225+*	40~100	最大22	上師器壺・瓶・須恵器・环・珠・瓦・石獣・獸骨					境界地にある。 SD01に切られる。
S D01B		溝		逆梯形	230+*	50~70	最大22	上師器壺・高杯・須恵器					境界地にある。
S D02A		溝		逆梯形	940+*	25~80	最大12	土師器壺・高杯・須恵器・环					境界地にある。 SK01に切られる。
S D02B		溝		逆梯形	140	30	10	土師器					SK01に切られる。
S D03		溝		逆梯形	170	30	4	土師器					
S D04		溝		逆梯形	125	25	7	なし					

## 第4章 まとめ

金隈小津遺跡の発掘調査は、原因者負担の原則も慣例化していない時代にあっては、少額の予算において実施したため、目に見える遺構が存在する限られた狭い面積を調査対象地とせざるを得なかつた。従つて、当時の考古学的な水準において、水田の確認は非常に難しく、又、発掘対象として水田跡の認定を行うのが困難な状態であったため、ついに古代～中世の水田の存在を見逃した可能性をもつっている。

又、調査区が狭かったこともあり、遺構として検出できたものは土壙2基、掘立柱建物1棟、溝4条、柱穴等にすぎなかつた。さらには、各遺構からの出土遺物も少なかつたため、遺構の時代の特定には困難が伴つている。

遺構の時期については、溝SD02から出土した高台付き坏からみて8世紀という年代が考えられる。溝SD01は、6世紀末から7世紀初頭の遺物が出土しているが、溝の規模や形態が溝SD02に類似していることや、互いに並行関係にあることなどから、溝SD02と同時期の溝であると思われる。更に掘立柱建物SB01もSD01及びSD02と並行関係にあることから同時期のものであるといえよう。土壙SK01からは遺物は出土しなかつたが、切り合い関係から一応8世紀以降の遺構としておきたい。

整地層から出土した須恵器・土師器等の遺物は、多くが7世紀後半から8世紀に属するものであり、これによって遺跡の形成時期が推定される。このほか、弥生時代と思われる石器や土器、古代から中世の内黒土器・中国青磁、近世の国産陶磁器等が出土している。

遺構の性格については、概要の項でも述べたように金隈小津遺跡では7世紀後半から8世紀の遺物を含んだ整地層を検出した。整地層の存在や瓦片の出土はこの遺跡が一般集落ではないことを意味しており、遺跡近辺における官衙等の存在が推定される。

金隈小津遺跡周辺ではいくつかの官衙等の存在が推定されている。まず当該地の西方約750mに位置する仲島遺跡では奈良時代の集落跡・井戸・柱穴等の遺構と、人面墨書き土器・墨書き土器等の遺物が出土している。さらに西側1.2kmに位置する井相田C遺跡では、8世紀後半の掘立柱建物・堅穴住居・井戸・土壙・溝・柱穴等が検出され、木簡・墨書き土器等が出土している。仲島遺跡と井相田C遺跡は同一の遺跡であるとみられ、一つの公的遺跡、例えば駅等の施設を構成していたと推定されている。両遺跡は那珂郡と御笠郡の境に存在する。また北側約400mに位置する立花寺遺跡の第2次調査では、古代の掘立柱建物群や横が検出され、越州窯青磁・邢州窯白磁・綠釉陶器・瓦・権等が出土し、調査報告書では官衙、又は豪族居館と推定したうえで、蓮田駅との関連を示唆している。

金隈小津遺跡は立花寺遺跡と同じ席田郡に属する。「倭名類聚抄」によれば席田郡には「石出」・「大國」・「新居」の3つの郷の名が記されているが、いずれも場所は不明である。立花寺遺跡と金隈小津遺跡とは直線距離で約400mであり、ともに一つの郷を形成していた可能性はある。

金隈小津遺跡の調査では、集落もしくは生産遺跡なのか、遺跡の種類や内容、検出した遺構の機能についても特定することができなかつたが、東西方向や南北方向の溝は律令時代に施工されたといわれる条里との関連を思わせる。少なくとも奈良時代の瓦や須恵器の出土は条里の施工に関連するだけではなく、上記の周辺の遺跡とも密接な関係にあると考えられる。調査の資料は僅少であるが今後の周辺地域における発掘調査の参考になるであろう。

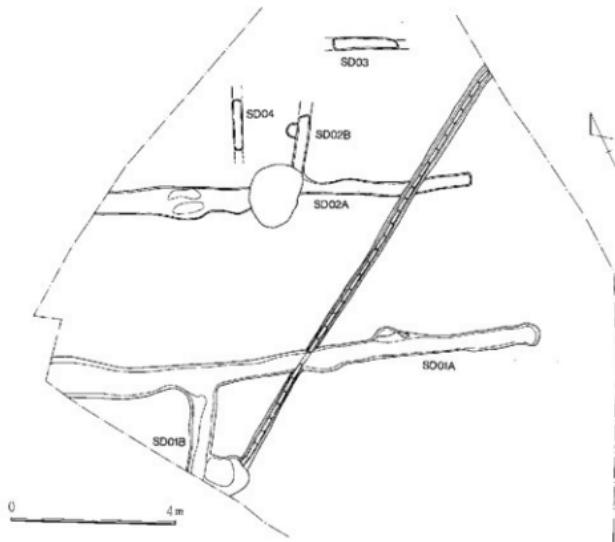


Fig14 滝SD01~04配置図(縮尺1/120)

## 参考文献

- |                    |                    |           |      |
|--------------------|--------------------|-----------|------|
| 1 「金保遺跡第1次調査報告」    | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第7集   | 福岡市教育委員会  | 1970 |
| 2 「金保遺跡第2次調査報告」    | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第17集  | 福岡市教育委員会  | 1971 |
| 3 「立花寺1」           | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第272集 | 福岡市教育委員会  | 1992 |
| 4 「立花寺2」           | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第321集 | 福岡市教育委員会  | 1993 |
| 5 「下月隈宮・後鹿跡」       | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第61集  | 福岡市教育委員会  | 1980 |
| 6 「下月隈天神森遺跡」       | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第76集  | 福岡市教育委員会  | 1981 |
| 7 「宝満山遺跡」          | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第26集  | 福岡市教育委員会  | 1974 |
| 8 「上月隈遺跡」          | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第257集 | 福岡市教育委員会  | 1991 |
| 9 「席田古墳跡1」         | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第356集 | 福岡市教育委員会  | 1993 |
| 10 「影ヶ浦古墳跡1」       | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第241集 | 福岡市教育委員会  | 1991 |
| 11 「席田遺跡新調査報告2」    | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第46集  | 福岡市教育委員会  | 1978 |
| 12 「席田遺跡群7」        | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第357集 | 福岡市教育委員会  | 1994 |
| 13 「久保園遺跡」         | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第91集  | 福岡市教育委員会  | 1983 |
| 14 「中尾遺跡」          | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第109集 | 福岡市教育委員会  | 1984 |
| 15 「城ヶ浦古墳群発掘調査報告書」 | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第151集 | 福岡市教育委員会  | 1987 |
| 16 「仲島遺跡1」         | 大野城市文化財調査報告書第3集    | 大野城市教育委員会 | 1980 |
| 17 「井相田C遺跡1」       | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第152集 | 福岡市教育委員会  | 1987 |
| 18 「井相田C遺跡2」       | 福岡市埋蔵文化財調査報告書第179集 | 福岡市教育委員会  | 1988 |



調査作業（西から）昭和53年当時

かねのくま おづ  
**金隈小津遺跡**

福岡市埋蔵文化財調査報告書第497集  
1997年（平成9年）3月31日

編集・発行 金隈小津遺跡調査会  
福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8-1  
電話（092）711-4667  
印 刷 ㈱西部毎日広告社  
福岡市中央区天神1丁目16-1  
電話（092）712-4536

金限小津遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第47集

1997

福岡市教育委員会